

生徒と教師の求める体育像の比較と 授業実践による効果

学籍番号 249349

氏 名 福間亮太

主指導教員 井上功一

副指導教員 林洋輔

1. はじめに

1節 研究背景と目的

継続的な運動実施は心身に好影響をもたらすが、20～50代の働く世代のスポーツ実施率は低い。働く世代、特に若い世代からの継続的な運動実施は、生涯にわたって健康で豊かな人生を送っていくために必要であると考えられる。それを促すためには、高等学校の体育において運動・スポーツの「楽しさ」を感じさせることが重要である。しかし、実習校の現状として、生徒の参加意欲の二極化や教師の指導観との相違が見られた。そこで本研究では実習校において、生徒が「楽しい」と感じる・教師が「良い」と考える体育の要素を明らかにし、それをもとに授業を考案・実践し、生徒の満足度が高く、かつ教育的意義のある体育の実践を目指すことを目的とした。

2. 調査1の結果と考察

1節 質問紙調査とインタビュー調査の結果

KH coder による階層的クラスター分析の結果、生徒を対象にした質問紙調査の回答からは、「楽しい」授業の要素として、8つのクラスターが抽出された。生徒と教師を対象にしたインタビュー調査の回答に対しても、同様の分析を行った。その結果、生徒が感じる「楽しい」授業の要素として、8つのクラスターが抽出された。また教師が考える「良い」授業の要素としては、10つのクラスターが抽出された。

2節 結果の比較と考察

生徒と教師が求める体育像の共通要素として「授業への参加のしやすさ」と「授業に参加する人の相互の関わり」が抽出された。その背景には、技能差の可視化による意欲の二極化・低下を防ごうという意図があると考えられる。また独自要素として生徒は「関係性の構築」と「承認・賞賛」、教師は「安全確保」と「規律」が抽出された。この相違は、授業での役割の違いが要因だと考えられる。

3. 授業考案

1節 授業考案の基本方針

調査1より「誰もが参加しやすい体育の実現」と「豊富なコミュニケーション」を授業考案の中心要素とした。大阪府立K高校の男子生徒を対象にサッカーの単元を実施した。具体的な工夫として、1点目は集団技能に焦点を当て、全員が参加する必然性のある活動を豊富に設定した。2点目は、関係性の深化や対話の活性化をねらい、単元を通しての固定のチームでの活動を取り入れた。

4. 調査2の結果と考察

1節 介入群と非介入群における授業満足感および上位・下位群別の得点の比較

介入群では5因子のうち4因子で事後得点が有意に向上した ($p < .05$)。非介入群では全ての因子で有意な変化は見られなかった。さらに、事前得点から各群を上位群と下位群に分類し、得点の伸び幅を比較した。上位群では有意な変化は無かったが、下位群では「成果」因子で介入群の得点が有意に向上していた ($p < .05$)。また、その他の因子においても、非介入群と比較し、介入群の伸び幅が上回っていた。

2節 考察および授業者としての省察

本実践は介入群における授業満足感を有意に向上させた。特に授業満足感が低い生徒に対し、物理的・心理的な授業への参加機会を保障したことが要因だと考えられる。また、下位群において「成果」因子で有意な向上が見られたのは、集団技能に焦点を当てたことによる効果であると言える。なお、非介入群では介入群と比較すると個人技能に焦点が当たる場面が多く、下位群が成果を実感しにくかったことが群間の差が見られた要因だと考えられる。

まず、単元を通した固定のチームでの活動は、チーム内での対話や笑顔が増え、関係性の構築と学習意欲の向上に効果があったと感じた。運営面では準備等の時間が削減され、活動時間が多く確保できた。次に集団技能への焦点化については、技能があまり高くない生徒が主体的に活動に参加する姿が見られ、チーム内で「みんなでやろう」という雰囲気が醸成されていた。

5. まとめ

調査1で抽出された共通点を授業の中心要素としたことで、介入群、特に下位層において授業満足感の有意な向上が見られた。また独自要素に対しては個別の方略を設けなかったが、生徒の要素は中心要素に包括されて実現され、教師の要素は授業の基本となる要素として機能していたと考えられる。以上の結果より、授業満足感を高めるためには、生徒と教師が求める体育像の要素の共通点と相違点を明らかにすることが重要である。しかし、これらの要素は学校や生徒の実態、地域等様々な要因により異なる可能性があるため、各学校において共通点と相違点を明らかにした上で、各学校や生徒に適した方略を考案する必要がある。